

看護学生の老人施設実習前後の老人イメージ

渡辺久美 近藤益子 太田にわ 池田敏子 前田真紀子 太田武夫

要 約

2週間の特別養護老人ホームの実習前及び実習後の学生の老人イメージを20項目の尺度を用いて調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 実習後のイメージの平均得点は、「ユーモアのない」から「ユーモアのある」へ、「生氣のない」から「生氣のある」へと好ましい方向へ上昇し、一方「経験に富む」、「穏やかな」、「現実的な」は好ましくない方向へ変化した。
2. 3分の1以上の学生が実習後に特にイメージが変化した項目として「ユーモアのない／ユーモアのある」の項目をあげた。
3. 老人像は全体として「暇な」、「弱い」、「孤独な」という否定的な老人イメージと「経験に富む」、「暖かい」という肯定的イメージで捉えられており、このイメージは実習前後で共通していた。

実習前後では全体として老人像に大きな変化はなかったものの、実習によって、より活動的な老人イメージを抱き、より現実的に老人をとらえていることが明らかになり、A園での老人看護学実習は教育上意義のある実習であると評価した。

キーワード：老人 イメージ 看護学生 看護実習 看護教育

はじめに

本学では、1990年のカリキュラム改正に先立って老人看護学を独立させるなど、開学当初より老人看護の重要性を認識し、老人看護学の教育に力を注いできている。この科目では、老人を総合的に理解して個々の老人に応じた看護援助ができる能力を養うことを目的に、2週間の特別養護老人ホームの実習を設けている。実習体験を通じて学生の老人イメージがどのように変化してくるのか、その実態を明らかにすることは教育評価の上で重要である。

「看護婦がどのような老年観をもっているかは、老人患者に対する看護方法にまで影響を与えていく¹⁾」と述べられているように、看護者の老人観は老人に対する看護の質に影響を及ぼす要因の一つである。看護学生が、実習を通じて老人に対する

正しい知識を習得し、深い老人観を持つことが、今後質の高い看護を提供していく上で重要となってくる。

老人看護学実習が老人看護学の教育においてどのような役割をもっているかを検討するため、近藤ら²⁾は実習前後の学生のイメージの変化や老人観についての調査を行った。その結果、実習を通じて学生の老人に対するイメージは、観念的、外見的な見方から具体的、内面的な見方に変化するなど実習の積極的な効果が認められる一方で、老人イメージは否定的な方向に変化する傾向が認められた。金川³⁾も施設入所老人を対象にした実習について「老人本来の姿、可能性がみえず、負の老人観の形成につながることもある」と指摘していることから、施設に入所している老人を対象とした老人看護学実習によって、負の老人観が形成

されるかどうかを明らかにする必要がある。

本研究では、近藤ら⁴⁾によって作成された老人イメージ調査のための新尺度項目を使用して、特別養護老人ホームにおける実習前後の老人イメージの推移について分析を行う。

方 法

調査対象は、1996年に特別養護老人ホームA園にて実習を行った本学看護学科3年生82人全員で

あった。

調査はA園での実習直前と実習直後のそれぞれの時点で行ったが、実習は9~10人で編成したグループ毎に1年間で終了するようローテーションする方式をとっているため、調査の実施時期はグループによって異なった。

実習前及び実習後に、20項目からなる尺度項目を記した調査票により老人イメージを調査した。調査票では各尺度項目の中央に「どちらでもない」

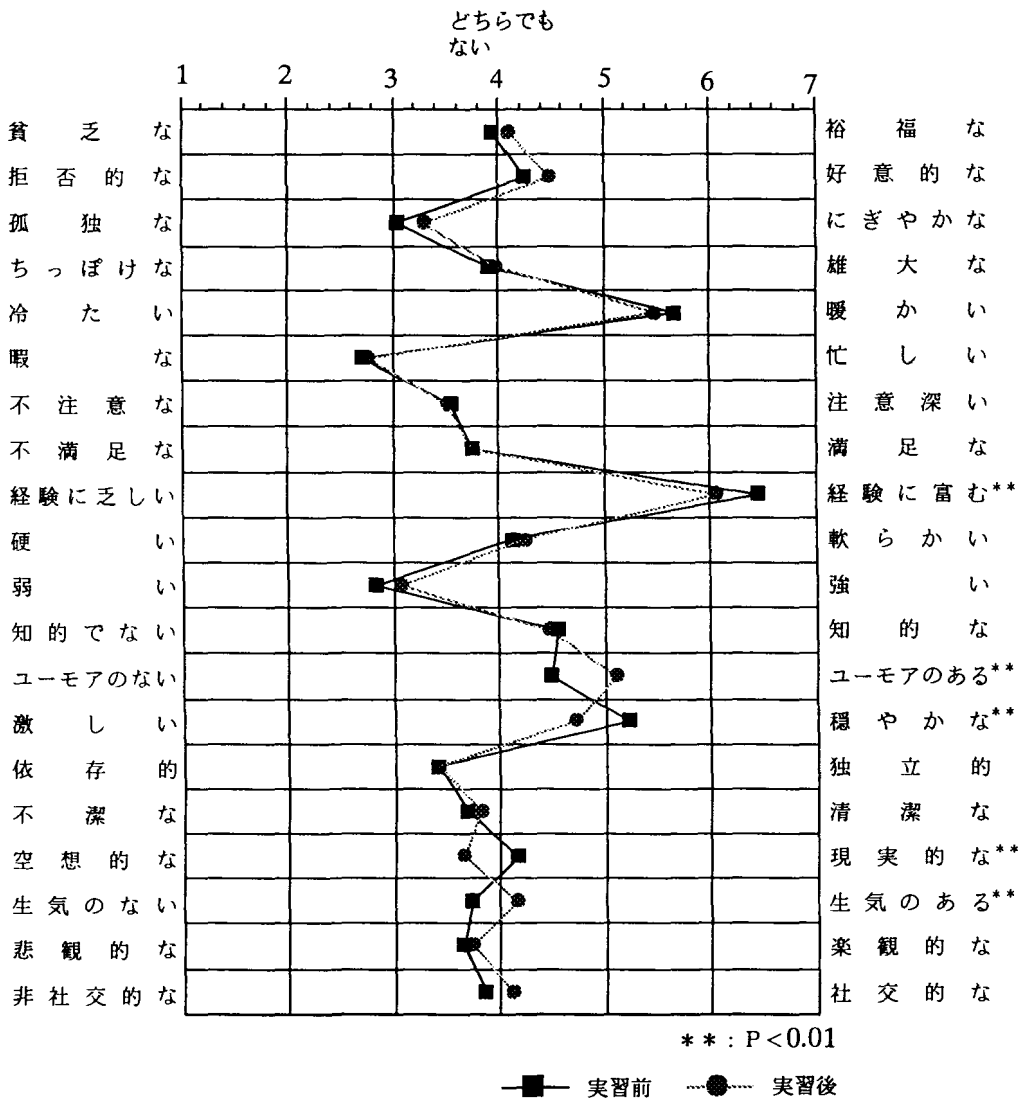


図1 実習前後の老人イメージの変化

を記した7段階で評定させた。また実習後には、特にイメージが変わった項目を20項目の中から3項目選択させた。

老人看護学実習は次のように行われていた。臨地の実習指導は施設側に委任し、カンファレンスや実習レポート等は教官により指導がなされた。学生は大部屋一部屋を担当したが、A園での看護体制は機能別看護であるため、担当外の患者についても看護婦・寮母と共に食事、排泄、清潔の援助を行った。学生が担当した部屋の入居者と主にコミュニケーションをとるか、担当外の様々な入居

者とデイルーム等でコミュニケーションをとるかは自由にさせた。従って個々の学生によって実習の進め方は多少違っていった。

データの得点化は、各尺度項目の回答結果を一般的に見て好ましいと思われるイメージの一方の極を基点として7, 6, 5, 4, 3, 2, 1と目盛りの順に得点を与えて行った。各尺度項目の得点の平均値、標準偏差を求めて実習前後のイメージの変化について分析した。データの解析にはパソコン用統計パッケージ HALUBAU (現代数学社)を使用した。平均値の検定はt検定($p < 0.01$)

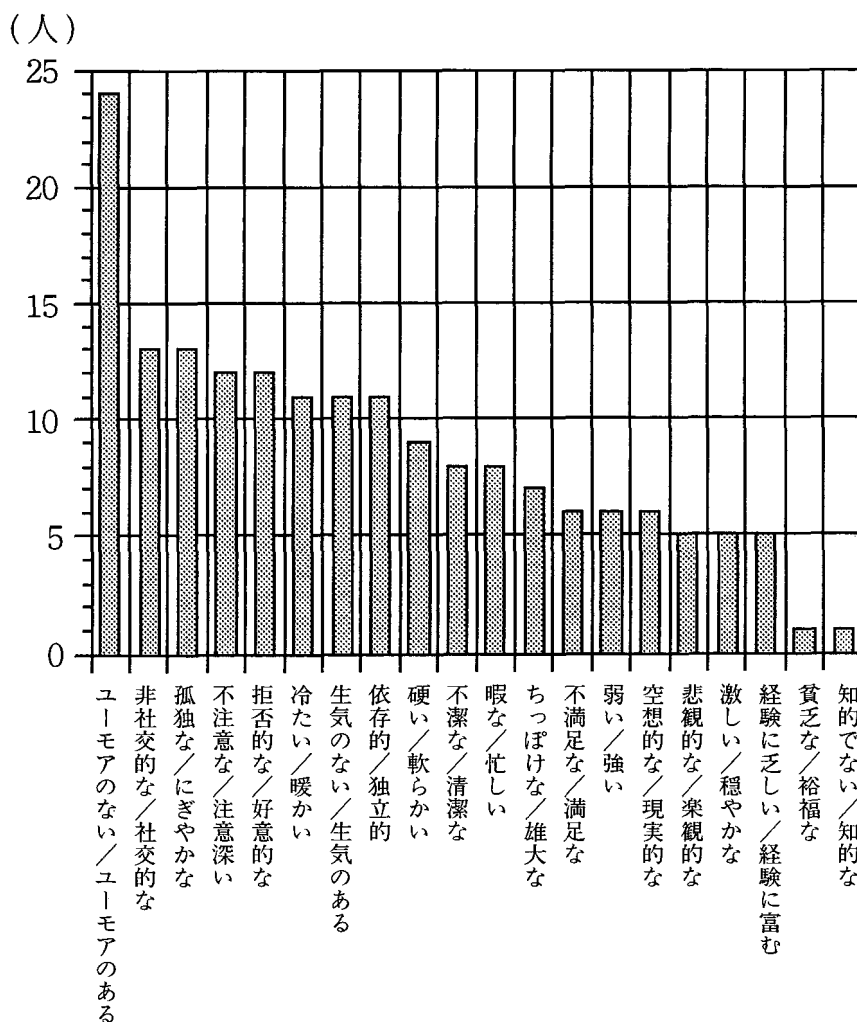


図2 「実習後最もイメージが変わった項目は」という質問に対して選択された項目

によった。

結 果

実習前後共に回答の得られた75人を分析対象とした。

1. 実習前後の平均値の比較

各項目の平均値は、図1に示したとおりである。実習後は実習前に比べ「ユーモアのない／ユーモアのある」、「生氣のない／生氣のある」の2項目でそれぞれ「ユーモアのある」、「生氣のある」の方向へ得点が上昇した。それに対して「経験に乏しい／経験に富む」、「激しい／穏やかな」、「空想的な／現実的な」の3項目ではそれぞれ「経験に乏しい」、「激しい」、「空想的な」の方向へ得点が下降した。

2. 実習後特にイメージが変わった項目

結果は図2に示したとおりである。際立って多く選択された項目は「ユーモアのない／ユーモアのある」で24人が選択した。最も選択されなかった項目は「貧乏な／裕福な」、「知的でない／知的な」の2項目でそれぞれ1人であった。20項目のうちで選択されなかった項目はなかった。

3. 全体的な老人イメージ

「どちらでもない」を基準に大きく肯定・否定の方向へ偏っている項目から、学生の全体的な老人イメージを推測すると、「経験に豊む」、「暖かい」という肯定的な老人イメージと「暇な」、「弱い」、「孤独な」という否定的な老人イメージを形成していた。

考 察

本研究の結果、実習前後で学生の老人イメージが有意に違いがあることがわかった。実習前後の各尺度項目の平均点の比較では、学生の抱く老人イメージは「ユーモアのない」から「ユーモアのある」の方向へ、「生氣のない」から「生氣のある」の方向に上昇しており、この2項目においては実習を通じてより肯定的イメージに変動したことが明らかになった。学生は2週間の実習を通じて実

習前に抱いていたイメージ以上にユーモアのある生き生きとした老人像を形成した。明るく活動的な老人イメージを抱いたことは評価すべき点である。

一方、「経験に富む」から「経験に乏しい」へ「穏やかな」から「激しい」へ「現実的な」から「空想的な」へと3項目においては実習後移動がみられた。一般的に「経験に富む」、「穏やか」といった老人イメージがあり、学生はおそらくそのイメージを作り上げて実習に臨んだと思われるが、現実の老人の姿は学生の抱いていたイメージと比べるとややギャップがあったのではないかと考える。学生が思っていたより、老人は「経験に乏しい」、「激しい」イメージであったことは、学生の中で抱いていた架空の老人イメージを、老人と接することにより現実のものとしたということであろう。この結果は、近藤らの調査報告と同様に、より現実的に老人を捉えたと評価する。「現実的な」から「空想的な」への変化は推測の域を出ないが、学生はA園での生活が現実社会と隔離して存在しているような印象をうけたのではないかと考える。「穏やかな」から「激しい」への変化には、質問紙作成上の問題もからんでいるのかもしれない。つまり、質問紙では「激しい」の項目が否定的イメージとして位置づけられているが、老人の活動的な側面を反映していると推測され、この点で一概に肯定・否定で老人のイメージをとらえようとする質問形式にも問題の残るところである。小川ら⁵⁾は、老人を理解するには人間発達の経過を踏まえた幅広い人間理解が必要であり、そのためには肯定-否定という単純のイメージを測定することに止まらない老人の多様性や個別性について測定できる用具の開発とその活用が急務であると述べている。今後はこの点についても検討し調査を続けてゆきたいと考える。

全体的な老人イメージについては、得点が肯定的・否定的なイメージに偏った項目から判断すると、学生は一般的な老人像を抱えていることが窺える。現代社会における老人像は、ぼけ老人、寝たきり老人、孤独死などに代表されるように暗い惨めなものであることも否定できない。否定的な

老人イメージである「暇な」、「弱い」、「孤独な」という現代社会での老人像はA園での実習によっても変化することはなかった。いかにユーモアのある日常を送っていようとも、住み慣れた我が家を離れ、家族とも離れて暮らすA園の老人の姿は、ある面では「暇な」、「弱い」、「孤独な」老人であることは事実であろう。このようなマイナス面に対して、実際入居者はどのように感じているのかさらに検討し、今後看護職としてどのように係わるべきかといったテーマで実習後にカンファレンスをもつことも、実習成果を高める上で重要になってくると考える。

肯定的なイメージでは「経験に富む」、「暖かい」というイメージを抱いていたが、老人の長所を的確に捉えており、学生が積極的に老人を理解しようと係わっていった結果よい関係を築き、老人の良い側面を捉えたのではないかと考える。今後はさらにイメージが肯定的に変化した学生や否定的に変化した学生の要因を探るなど、定期的・継続的に調査を続け検討し、学生の個別性に対応した教育方法について検討してゆきたい。

施設入所老人を対象にした実習を通して、学生は負の老人観を形成していることがあるとの問題点について以下に考察する。本調査においても学生の全体的な負の老人イメージは「暇な」、「弱い」、「孤独な」というイメージであった。しかしながら、このイメージは実習前後を通して変化が見られず、学生は実習前からこのような負の老人観を抱いていた。社会で一般に語られている老人の負のイメージは、施設に入所せざるをえないような障害をもった老人に基づいて作り上げられている面がある。前述したように、施設における老人が「暇な」、「弱い」、「孤独な」一面を持っていることは事実であり、学生が地域で健康に暮らす老人と接していた場合、違ったイメージを形成していたことも予測される。これらのことを考慮すれば、学生が実習後も変わらず負のイメージを抱いていたことは、学生が施設入所老人の実態を直視したにすぎず当然の結果であろう。このようなマイナスの側面も持つ施設入所老人との接触の中で、学生は老人のプラス面を捉えており、実習前

に抱いていたイメージ以上にユーモアのある生き生きとした老人イメージを実習を通じて形成した点は高く評価できる。平均値が減少した項目についても、より現実的に老人をとらえられるようになった点で評価でき、また平均値は減少しているものの、全体の老人イメージとしては「経験に富む」、「暖かい」という肯定的イメージを実習後も抱いており、全体としては施設実習によって負の老人観を形成している可能性は少ないものと考えられる。実習後に特にイメージが変化した項目として「ユーモアのない/ユーモアのある」という項目をあげた学生が3分の1以上いたという点からも、A園における老人看護学実習は意義のある実習であった。

本研究において、わずか2週間という短期間の実習であったにもかかわらず、学生は実習を通じて、老人に対するイメージをかなり変化させていたことが明らかになった。このことから、実習期間は短い、実習という経験が学生に与える影響は大きいということを我々教員は再確認するとともに、核家族化が進んでいる現在、その生育環境を考慮した老人看護学の教育が望まれる。老人との同居経験の有無や接する機会の有無、また老人に対する意識の違いが、学生が抱く老人イメージに対してどう影響しているのかについても今後検討していきたい。

参 考 文 献

- 1) 鎌田ケイ子(編): 図説臨床老人看護講座1 老人の理解と看護の展開。メジカルビュー社、東京、16-17、1988。
- 2) 近藤益子、太田にわ、池田敏子、前田真紀子、伊東久恵、太田武夫: 看護学生の老人施設実習前後における老人観及び老人イメージの変化に関する研究。岡大医短紀要3: 83-87、1992。
- 3) 金川克子: 老人看護の実習の場をめぐって。看護展望13(5)、22-26、1988。
- 4) 近藤益子、太田にわ、池田敏子、前田真紀子、永田博、太田武夫: 看護学生の老人イメージ調査のための尺度項目の構成。岡大医短紀要4: 105-113、1994。
- 5) 小川妙子、定廣和香子: 老人看護学教育研究の動向と今後の課題。看護教育36: 454-459、1995。

Nursing students' images of the elderly before and after a two-week nursing practice

Kumi WATANABE, Masuko KONDO, Niwa OHTA,
Toshiko IKEDA, Makiko MAEDA and Takeo OHTA

Abstract

This study investigated how nursing students perceived the elderly living in a nursing home for the elderly. Testing was done both before and after they experienced a two-week nursing practice at the nursing home. Three findings were obtained. (1) The students regarded the elderly not only as more humorous and vital but also less experienced, peaceful, and realistic before than after experiencing the practice. (2) Over a third of the students named humorous/not humorous as an item for which they experienced a marked change in image of the elderly. (3) The students generally regarded the elderly as being experienced, warm, bored, weak, and lonely. The findings indicate that the nursing practice provided the students with an opportunity to form better and realistic images of the elderly.

Key words : images, elderly, nursing students, nursing practice, nursing education

School of Health Sciences, Okayama University